

日本語とアラビア語エジプト方言における不満表明に関する考察

—不満表明と応答からなる不満談話シーケンスに着目して—

Marina B. ASAD (立命館大学大学院生)

1. はじめに

不満を表明することは、そもそも他者の感情を害するものであり、会話参与者間の社会的な関係を対立させる恐れがある。そのため、誰もなるべくならば回避したいものであるが、それでもなお「不満表明」を行う場合は、そこに何らかの目的が託されていると考えられる。例えば、山岡ら(2010: 182)によると、「相手が与害行為に気づいていない」状況の時にそれを気づかせたいとか、「相手の謝罪が足りない」状況の時に相手からの謝罪を引き出したいなどの欲求が喚起されている場合が存在する。しかし、単に相手によって引き起こされた好ましくない事態に対して不満を述べれば良いというわけではなく、不満を表明したいと思っている話し手は、発話の際、聞き手との社会的関係や聞き手の心理的状态を考慮する必要があり、聞き手側も発話を解釈する際に、話し手をそのような発話に導いた社会的・心理的背景を考慮せざるを得ないと考えられる。

そこで、本研究では、話者にとって聴者の存在が明確に意識されている対人的コミュニケーションとしての不満談話シーケンスを分析対象として取り上げ、不満を表明する側の言語行動の指向性はどのように相手との人間関係と応答発話によって影響され変化していくのかという問いをリサーチクエスチョンとする。そして、「不満表明」とそれに対する応答に注目し分析することで、日本語とアラビア語エジプト方言における不満談話の特徴の違いを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

これまでの日本語による不満表明に関する先行研究では、日本語母語話者と日本語学習者の不満表明行為を比較する初鹿野ら(1996)をはじめ、韓国人母語話者と韓国人日本語学習者を対象とする朴(2001; 2002)、李(2004; 2006)、など、日本語教育関連の研究が多く存在する。しかしながら、本研究は言語文化の比較に研究の中心を据えているため、本節では、比較文化研究、なかでも、話し手と聞き手の間の人間関係を焦点に不満表明を考察した研究(郭, 2007; 呉, 2008; 牧原, 2008; 程, 2012)、及び不満表明を発話応答の観点から取り上げた先行研究(崔, 2009)の知見を紹介する。

2.1 親疎／上下関係の観点から見た不満表明の研究

郭(2007)は、千葉県における私立大学の日本人大学生及び大学院生に DCT¹ 調査を行い、不満表明ストラテジーに影響を及ぼす諸要因を分析した結果、社会的な要因と文化的な要因に区別されることを明らかにした。前者の社会的要因には、社会的な距離、上下関係、力関係などが含まれるが、その一つである親疎関係に基づく不満表明の特徴としては、日本では、相手が目上である場合、親疎関係はあまり影響を与えない一方、同等か目下の場合、親疎関係によってかなり左右される。また、店で待たされた上に料理を間違えられた場合のように、話し手が不満を表明する権利が社会的に保証されている場合、不満表明の心理的負担が少なく、より直接的に不満を表明しても正当だとみなされると主張されている。

牧原(2008)は、同等の立場にある親しくないクラスメートに対し、日本人大学生が授業中に私語がうるさくて気になる場合どのように注意するかという調査を行った結果、日本人は相手に対する《不満表明》や《改善要求》を「笑いながら」行うというように、非言語行動として配慮行動を行う傾向があるが、外国人にはそうした傾向がないと主張している。同様に、呉(2008)は、日本人大学生および台湾人大学生を対象に、上下関係(先輩・後輩)を比較する DCT 調査を行い、改善要求ストラテジーを分析した結果、日本人学生の言語行動の指向性は人間関係の維持であるのに対して、台湾人は目的達成であることを明らかにした。一方、程(2012)は、東北大学の日本人大学生 45 名、及び蘇州大学の中国人大学生 40 名に対して、先輩・同輩・後輩の三つの上下関係を対比する DCT 調査を行った。その結果、日本人は目上に「共感」を示したり、同等の人に「直言」したり、目下に「警告」したりする傾向が強く、上下関係による対応の違いが明らかとなった。

¹ DCT とは「談話完成テスト(Discourse Completion Test)」のことで、中間言語語用論(interlanguage pragmatics)や発話行為論の分野でデータを集めるのに広く使われており、対話の状況が調査紙に印刷され、各々の状況で被験者が通常口にすることを書くように求める自由記述式のアンケートである(伊藤, 2004)。

2.2 応答発話の観点から見た不満表明の研究

崔(2009)では、10代後半から20代後半までの中国語母語話者の女子留学生40人と関東地方の日本語母語話者女子大学生40人を対象に、親友と映画を見る約束の時間に特別な理由なしに三回も30分遅刻されるという一場面を設定したロールプレイ調査を行った。結果として、日本語のデータでは、不満を言う側は言われる側の理由説明に注意を払い、それを謝罪として受け取るか、相手の態度によっては再び不満表明を行った。つまり、不満を言う側と言われる側は共通の目的を持って談話が進行する。その一方で、中国語のデータでは、不満を言う側と言われる側の間には共通の目的がなかったということが明らかとなった。この「共通の目的がない」というのは、不満を言われる側の態度によって、不満を言う側の発話行動に変化がなかったという意味で用いられている。そして、中国語で不満を言う側は、不満談話全体の流れにおいて、一方的に不満について述べ、不満を言われる側は一方的に責任を認めるか回避したことが指摘された。

3. 研究目的と研究手法

以上のように、「不満表明」に関しては、日本語を様々な言語と比較しながら、それぞれ異なった角度からの議論がなされてきた。本研究はこうした議論を踏まえて、親疎関係を焦点とする日本語とアラビア語エジプト方言の不満談話の対照分析を行う。特に、先行研究での分析対象が主に、不満を感じる側からの一方向的な「不満表明」のストラテジーであったのに対し、本研究では「不満談話シーケンス」、すなわち、不満を言われる側の応答発話も含めた対話データを分析対象とする。したがって、本研究は単に不満を言う側と言われる側双方の第一発話だけではなく、聞き手と話し手の発話のターンが連なる不満談話シーケンスの中で、不満を表明する側の言語行動の指向性がどのように相手との人間関係に影響され、相手の応答発話によって変化していくのかという問いを解くことにより、日本語とアラビア語エジプト方言における不満談話の特徴の違いを明らかにすることを目的とする。

研究手法としては、10代後半から20代後半までのエジプト人アラビア語母語話者（以下、EANS）の大学生・院生100人（50組）（男19組、女31組）と関東地方の日本語母語話者学生（以下、JNS）40人（20組）（男9組、女11組）を対象に、従来研究(初鹿野ら, 1996; 朴, 2000; 李, 2004; 2006; 崔, 2009)でよく用いられてきた「相手に三回も待ち合わせに遅刻される」という場面設定のロールプレイ調査を用いた。ただし、本研究では、従来研究で30分と設定されていた遅延時間を45分に変更した。というのは、予備調査の時点で、EANSは相手が30分遅れて来ても不満を感じない人が多いという、エジプト人固有の社会文化的背景が存在することが分かり、遅延時間を45分に伸ばすことで、JNSと対等の比較が可能になると判明したからである。そこで、計130のロールプレイ対話を録音して収集し、それらを宇佐美(2003)の「改訂版：基本的な文字化の原則(BTSJ)」に従って文字化した。そしてその談話資料に対し、山岡(2008)の「発話機能論」に基づいた発話機能のラベリング作業を行い、両言語の不満談話の特徴の対照分析を行った。

「発話機能」(speech function)とは、山岡(2008)によれば、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの」である。この発話機能が発動するためには、会話参与者間の人間関係や、会話参与者の利害、能力、予備知識、社会通念などさまざまな語用論的諸要素群である語用論的条件が必要となる。このとき、そうした語用論的条件は、言語行動を行う二者間において共有される必要がある。さらに、発話機能の最も基礎的なタイプは《要求》(demanding)と《付与》(giving)であると考えられており、この両者はあらゆる二者の会話の原型となる。そして、この両者を組み合わせた一まとまりを、会話の一つの単位と考えるべきであると山岡は主張し、それを「連」(stream)と名付けた。

本研究では、こうした発話機能論の考えに基づいてラベリング作業を行ったが、実際の不満談話シーケンスを分析するなかで、山岡(2008)の提案する発話機能タイプだけでは捉えきれない発話があったため、発話機能の定義に従い、山岡ら(2010)、崔(2009)を参照しながら、独自に発話機能の追加を行った²。さらに、山岡(2008)の語用論的条件以外に「パラ言語的条件」を追加した。この「パラ言語的条件」とは、イントネーション、リズム、ポーズ、声質といった音声発話の周辺の側面に関する条件である。こうしたパラ言語は、話し手の発話の意図及び聞き手の発話への解釈を大きく左右する。例えば、「どうして遅れてきたの？」という発話は、普通に言えば単なる《疑問》であるが、言い方によっては《非難》や《叱責》を表すこともある。

4. 結果と考察

上述したように、本研究では、日本語とアラビア語エジプト方言における不満談話の特徴における共通点及び相違点を考察するために、不満を表明する側の言語行動の指向性がどのように相手との人間関係に影響され、不満を表明される側の応

² これは《あきらめ》、《改善約束要求》とそれに対する応答の《改善約束》、《補償援助要求》、《弁明承認要求》とそれに対する応答の《弁明承認》、《状況説明》、《賠償提供》である。

EF44 (親しくない相手との場面)

دلوقتي إنتى جيتى متأخرة ومكانش ينفع إنتى تيجى متأخرة. دلوقتي إحننا ملتزمين بشغل ولازم تلتزمى بالوقت اللى أنتى حتيجى فيه. ليه إتاخرتى؟ (今遅れてきましたけど、それ、よくないですよ。やらないといけないことがあって、時間を守らないといけないことがあるでしょう。何で遅れてきたんですか?)	A	504
أسفه. والله مكانش قصدى. الطريق... أنتى عارفة الطريق (すみませんが、仕方なくて、渋滞とか…わかるでしょう)	B	505
بس دا مش مبرر كافى. كنتى قادرة تنزلى بدرى شوية إحننا مرتبطين بشغل (知りませんよ、それは、もっと早くうちを出ることだったのに)	A	506
معلش، أنا أسفه. خلاص آخر مرة (ごめん、ごめん、今回は最後です)	B	507

EF46 (親しい相手との場面)

أنتى أتاخرتى ليه كل دا ؟، أنا واقفة مستنياكى (なんでそんなに遅れてきたの?、待っていたのに)	A	516
معلش، والله يا بنتى الطريق زحمة (ごめん、本当に道が混んでいたんだよ)	B	517
طب حتى ردى على التليفون (じゃ、電話に出てよ)	A	518
معلش، أنا مكنتش سمعاه (ごめん、聞いていなかった)	B	519
يعنى إيه يعنى ↑. الفيلم ابتدا (どういこと↑映画始まっちゃったよ)	A	520
خلاص كنتى تدخلى، وأنا حدخلك عطلول. معلش، آخر مرة (じゃ、先に入ればよかったのに、私その後に入るはずだったけど、ごめん、今回だけね)	B	521
وفى الآخر بتزعلنى (でも、そうしたら怒るでしょ)	A	522
لا، معلش حقا عليا (いや、本当にごめん)	B	523

図1: アラビア語エジプト方言の不満談話シーケンスの例

JF18 (親しくない相手との場面)

216	B	すみません。また、遅れてしまいました
217	A	うーん。いつもですね
218	B	本当にすみません。ちょっと連絡しようと思ったんですけど、...ちょっと電車でとかできなかつたんで、...
219	A	うーん、分かりました。まー、はじめましょうか。

JM03 (親しい相手との場面)

36	B	ごめんなさい。結構遅れちゃった
37	A	おまえは、何時とってんの??
38	B	45分↑??
39	A	いやーいやー、というかさ、...もうおまえはこれ3回目なんだけども、(1.0)ふざけている、本当に
40	B	いや、そんなつもりはないんだけど↓
41	A	"6時に"って言ったじゃんか↑

図2: 日本語の不満談話シーケンスの例

答発話によって変化していくのかという点に着目して分析を行った。その結果として、(i)不満談話シーケンスの開始をどちらの会話参加者が行うのか、(ii)不満談話の「連」にどんな特徴があるのか、そして(iii)親疎関係によって不満談話シーケンスにどのような影響があるのか、という点に関する日本語とアラビア語エジプト方言の異同が明らかとなった。以下、具体例を交えて説明する。

4.1 不満談話シーケンスの開始の特徴

不満談話を開始する参加者に関しては、相手との親疎関係にかかわらず、アラビア語エジプト方言においては、不満を言う側(図中の参加者A)によって不満談話が開始される場合が圧倒的に多い(96.7%)。その一方、日本語においては、不満を言われる側(図中の参加者B)によって不満談話が開始される方が多い(74.4%)ことが分かった。このことから、アラビア語エジプト方言では、不満を言われる側は、最初は自分の非を認めず、相手が自分を責めるのを待つことが多いと考えられる一方、日本語では、不満を言われる側は、最初から自分が起こした非を認め、責任を承認する傾向が強いと言える。

4.2 不満談話の「連」の特徴

次に、両言語の不満談話における「連」を分析した結果、以下のようなことが判明した。

まず、アラビア語エジプト方言の不満談話シーケンスにおいて、親しい間柄の場合、不満を言われる側の第一発話から第四発話まで《自己弁護》あるいは《謝罪》+《自己弁護》による責任回避の発話機能タイプがよく見られた(図1: 505, 517, 519)。一方、親しくない間柄の場合、不満を言われる側は《謝罪》など責任承認として機能する発話機能タイプが、責任回避の発話機能タイプとほぼ同程度使用されていた。このとき、不満を言う側は、いずれの場合においても、第一発話から第四発話まで明示的不満表明の一つである《非難》の発話機能タイプを使用する傾向が大きかった。つまり、アラビア語エジプト方言の場合、不満を言う側は、言われる側の応答発話にかかわらず、一貫して明示的に不満を表明することが分かる。このことから、アラビア語エジプト方言での不満を言う側と言われる側の間には相互行為上の共通の目的が存在せず、それぞれの目的を維持したまま談話が進行していくことが分かる。

それに対し、日本語の不満談話シーケンスの場合、不満を言われる側が談話開始時に《謝罪》による責任承認を行うか否かにかかわらず、不満を言う側は前半では《非難》の明示的不満表明を使用する傾向が強い(図2: 217, 37, 39)が、後半

では、明示的不満表明の発話機能の使用頻度が著しく低下し《忌避》による非明示的不満表明の使用がはっきりと見られた(図2:219)。つまり、不満を言う側は談話シーケンスの冒頭以降で、不満を言われる側の責任承認の態度を受けて、使用する発話機能タイプが変化したと考えられる。このことから、日本語では、不満を言う側と言われる側が相互行為上の共通の目的を実現するという形で談話が進められていくことが分かる。

4.3 親疎関係による不満表明の指向性

不満を表明するかどうかに関しては、アラビア語エジプト方言と日本語はともに、相手との親疎関係にかかわらず、不満の感情を隠すよりは表明する傾向が大きいことがわかった。しかし、アラビア語エジプト方言の場合は、親しくない相手に対する不満は隠す傾向が見られたのに対し、日本語の場合は、不満を隠す傾向が全く見られなかった。

また、不満談話シーケンスの長さに関しては、相手と親しい場合、日本語よりアラビア語エジプト方言のほうが、不満談話シーケンス自体が長くなるが、相手と親しくない場合は、アラビア語エジプト方言より日本語のほうが、不満談話シーケンスが長くなることが判明した。このことから、相手と親しい場合に比べて、親しくない相手の場合、アラビア語エジプト方言では、不満談話を長く続けないことが親疎関係への配慮と関係していると考えられるが、日本語では、不満談話を長く続けることが親疎関係の配慮と関連していると考えられる。つまり、両言語での親疎関係に対する配慮の感覚が異なっていることが明らかとなった。

5. おわりに

本研究では、これまであまり扱われることのなかった相互行為としての不満表明とそれに対する応答の分析を行い、その結果をもとにアラビア語エジプト方言と日本語の母語場面を比較することで、エジプトと日本の言語行動の文化的特徴を明らかにしてきた。しかしながら、ロールプレイ調査の場面や被験者数が限られていたため、結果の妥当性がまだ十分とは言えない。そこで、今後の課題として、調査場面や質問項目を拡張し、上下関係の社会的変数も加え、被験者の人数と年齢の範囲も拡大し、さらに両言語に見られた不満表現の言語形式的な観点からの分析も行うことで、より明確な両言語の不満談話の特徴を明らかにしたいと考える。

謝辞

本稿の執筆にあたって指導教員である立命館大学大学院文学研究科の岡本雅史先生から有益なコメントを頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

- 伊藤恵美子 (2004). データ収集における方法論の検討：言語教育に寄与する発話データを集めるには？ *ことばの科学*, 17, 5-22.
- 宇佐美まゆみ (2003). 改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究, 平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2) 研究成果報告書, 4-21.
- 郭碧蘭 (2007). 不満表明に対するイメージ及びそのストラテジーに影響を与える要因—日本語母語話者と学習者との比較を通じて— *明海対照言語学論集*, 7, 11-20.
- 呉岳樺 (2008). 不満表明における改善要求ストラテジーの日台比較 *台湾日本語文學報*, 24, 231-252.
- 崔東花 (2009). 不満表明とそれに対する応答—中国語母語話者と日本語話者を比較して— *多文化接触場面の言語行動と言語管理*, 7, 千葉大学大学院人文社会科学部研究科, 43-63.
- 程鐸 (2012). 不満表現ストラテジーにおける日中対照研究 *東北大学大学院国際文化研究科国際文化交流論専攻*, 修士論文.
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996). 不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較— *日本語教育*, 88, 128-139.
- 朴承圓 (2000). 「不満表明表現」使用に関する研究—日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国語母語話者— *言語科学論集*, 4, 51-62.
- 朴承圓 (2001). 韓国人日本語学習者の言語行動の指向性に関する一考察：不満表明を例に *言語科学論集*, 5, 73-84.
- 朴承圓 (2002). 不満表明場面における一人称「私」の使用をめぐる—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の相違— *文化*, 65(3・4), 342-323.
- 牧原功 (2008). 不満表明・改善要求における配慮行動 *群馬大学留学生センター論集*, 7, 51-60.
- 李善姫 (2004). 韓国人日本語学習者の「不満表明」について *日本語教育*, 123, 27-36.
- 李善姫 (2006). 日韓の「不満表明」に関する一考察—日本人学生と韓国人学生を比較して— *社会言語科学*, 8(2), 53-64.
- 山岡政紀 (2008). 発話機能論 *くろしお出版*
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010). コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門 *明治書院*